

事例1 秋田県立秋田南高校

教師との対話と生徒自身の内省により、 メタ認知能力を高め、高い志を育む

秋田県立秋田南高校では、面談や振り返りなど、教師との対話を通して生徒に内省を深めさせ、自分の将来と向き合わせている。そして、探究学習や学校外活動で多様な経験をさせることで、将来への視野を広げさせ、多様な考えを受容する態度の育成にもつなげている。失敗を含めた様々な経験は、生徒を大きく成長させており、自ら選んだ進路を貫こうとする生徒が増えているという。

志を育み、第1志望を貫く 指導を学校全体で徹底

基本理念に「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を掲げる秋田県立秋田南高校は、国立大学に例年150人前後が合格する進学校だ。2015年度、文部科学省のSGH（*1）の指定を受け、1年次は必修の「国際探究Ⅰ」で、2・3年次は選択科目として、探究学習を行っている（図1）。また、16年度に中等部が併設されて中高一貫校となった。

同校の生徒は、素直で優しい反面、さらなる可能性を目指そうとする意

欲に課題が見られた。1学年主任の小名雅司先生は次のように述べる。

「ポテンシャルが高い生徒が多いと感じています。生徒に自身の可能性の高さに気づかせ、高い志を育むことが、我々の役割です」

そうした課題意識を持つ中、同校では進路指導を変化させている。地域の期待を担う進学校として、国立大学合格を目指す進路指導が重視されてきたが、ここ数年は、現役合格にこだわらず、生徒自らが高い目標を掲げ、その第1志望を最後まで貫かせる指導を全校で行っている。進路指導部副主任の中村東先生は、次のように語る。

「かつての生徒には、まだまだ伸

図1 秋田南高校のSGHでの探究学習、及び「国際探究Ⅰ」の内容



秋田県の「農と食」の特長と課題、同県と交流のあるタイの現状などから「世界の食糧問題」について考察し、解決策を提言する。

* 学校資料を基に編集部で作成

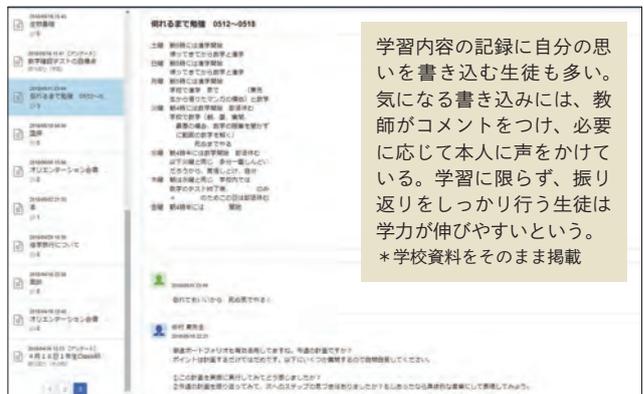
* 1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

図2 定期考査の振り返り



定期考査の振り返りには、「Classi」のポートフォリオを活用。教科ごとに、「うまくいったところ」「駄目だったところ」「次回に向けて継続したいこと」「改善したいこと」を書き込む。
*学校資料をそのまま掲載

図3 学習内容の書き込み例



学習内容の記録に自分の思いを書き込む生徒も多い。気になる書き込みには、教師がコメントをつけ、必要に応じて本人に声をかけている。学習に限らず、振り返りをしっかり行う生徒は学力が伸びやすいという。
*学校資料をそのまま掲載



学年全体で生徒の状況を把握し、個別にアプローチ

改善を促している。

定期的な面談以外にも、昼休みや放課後などの時間を活用して、多くの教師が適宜面談を行っている。例えば、「Classi」のポートフォリオに学習内容を記録させているが、「文理選択で迷っている」「自分は変わりたい」といった生徒の変化をうかがわせる書き込みを見つけたら(図3)、すぐに生徒に声をかける。

「生徒は、学習内容の記録に加え、自分の思いも書き込んでいます。少しの変化でも気づけ、すぐに対応できるようになりました」(小名先生)

ただし、担任が必ず声をかけるとは限らない。生徒の様子を見て、すぐに支援が必要と判断したら声をかけ、自力で解決できそうな場合はしばらく様子を見る。

そういった生徒の情報は、月1回の学年部会や職員室での会話を通して学年団で共有し、担任に限らず学年全体で様子を見る。そして、教科担当が授業中にさりげなく声をかけ

ることもあれば、副担任や学年主任が面談を行うこともある。生徒の悩みや教師の個性に応じて、広く、個別にアプローチしている。

学校外活動で視野が広がり、将来をより深く考えるように

生徒の資質・能力を高めるために、同校がここ数年積極的に活用しているのが学校外活動だ。

同校のSGHでは、「世界の食糧問題」をメインテーマとし、県内のフィールドワークや、地域の社会

人や留学生との意見交換など、世界や地域社会と自分とのつながりを考える機会を設けている。そこでの気づきから、生徒の意識が学校外にも向けられるようになり、多くの生徒が、大学主催の講座や地域づくりのイベント、海外研修、数学オリンピックなどに積極的に参加し、多様な経験を積んでいる。

学校外活動で自信を深めていく様子は、生徒が記入するポートフォリオからも見て取れる。例えば、国際教養大学のイベントに参加した生徒は、学生や海外留学生のオープンな雰囲気刺激を受け、自身の発表では身振り手振りが加わり、思いを伝えられたと、振り返っていた。

また、大学の講座に刺激を受けてバイオテクノロジー系の学科を志望するようになった生徒や、海外留学を機に個人でNPOの活動に参加する生徒など、学校外活動を自己実現に結びつける生徒も現れている。

「学校外における多様な経験が、生徒の視野を広げ、自分と社会とのつながりを意識して進路を深く考えるきっかけとなり、その結果、目標を明確化させていると感じます。学校外でしかできないことを体験して

自己肯定感を高め、学校での活動も頑張るといふ、好循環ができています」と思っています」（佐藤先生）

他者との違いに気づき 多様性を認める場を設ける

同校が「重点目標達成のために育成する資質」に掲げる、①基本的知識・技能・習慣、②探究力、③協働力の育成に向けて、多様なものの見方や考え方を受け入れる雰囲気づくりも意識して行っている。例えば、クラスで話し合う場面では、多数派の意見に押されて自分の考えや気づきを言い出せないといったことがないようにしている。中村先生は次のように説明する。

「全員の意見が一致することは好ましいように思えますが、何か盲点があつて誰も気づいていないのなら、それは危険な状態です。新しいアイデアは、多様な価値観がぶつかり合う中で生み出されるものであり、生徒が多様な意見を出し合う場を積極的に設け、多面的に物事を見る目を養うことが大切だと考えています。それは、自分と他者との違いに気づき、多様性を認める態度にも

つながるでしょう」

授業や探究学習では、どんどん考えやアイデアを出すよう、生徒に促している。取り組みを重ねる中で、議論を活性化させるためにあえて人と違う意見を述べたり、問題提起したりする生徒が現れているという。

「探究学習を通して、人の意見を受け入れるだけではなく、批判的に見て、判断し、考えを発展させていくとする意識が芽生えていると感じています」（佐藤先生）

「AIに代替される仕事が多くあると言われる中で、選ばれる人材になるためには、自分にしかない強い個性を持つことも必要でしょう。『人とは違うことをしよう』といった気概を持つ生徒が増えたことを、心強く思っています」（中村先生）

失敗も見守り、声かけで 自身の課題に気づかせる

失敗経験や挫折も大切にしていく。実は入学当初、ほかの生徒や外部講師から投げかけられる批判的な意見を受け止められない生徒が相当数いるという背景がある。

「大人なら、『できない自分』を認

めつつ、その都度解決の方策を考え、乗り越えていくことの連続が人生だと分かってても、生徒はそうした経験を積んでいる最中なので、分かりません。生徒が失敗しそうになっても、教師はあえて手を出さず、見守ることになっています」（小名先生）

例えば、探究学習で生徒が問題を抱えていても、教師は「何が足りないとと思う?」「どこを変えたらよくなるのかな?」と問いかけ、改善すべき点を生徒自身に気づかせるようにしている。

「失敗は、教師が仕かけられることではありません。試行錯誤の中でおのずと失敗経験もできるのが、課題研究のよいところであり、だからこそ1年次では生徒全員に取り組みさせています」（小名先生）

さらなる成長に結びつく 振り返りの方法を模索

面談を中心とした教師との対話や、学校内外での多様な経験を通して、志を高く持つ生徒が増えていく。模擬試験での合格判定が厳しい結果でも第1志望を貫いた生徒、医学科現役合格がかなわなかったけれ

ども、引き続き医師を目指すことを選んだ生徒、海外留学に挑戦する生徒など、多くの生徒が夢に向かって力強く進んでいる。

そうした生徒の学びをさらに充実させるため、ポートフォリオを活用した振り返りを深化させたいと、中村先生は語る。

「振り返りでは、活動内容をただ記録するだけの生徒もいれば、活動を通して気づいたことや、今後すべきことにまで言及する生徒がいるなど、そのレベルはばらばらです。大学入試のための活動記録にとどめるのではなく、生徒一人ひとりに深い内省を促して、その後の行動に結びつくような振り返りの方法を工夫したいと考えています」（中村先生）

大学入試で求められる教科学力については、これまで通り、授業でしっかり身につけさせていく。

「今後も、難関大学の入試においては高い教科学力が求められることと思います。探究学習や課外活動などを通して、これからの社会で求められる資質・能力を高める一方、引き続き、高い教科学力を生徒に育んでいけるよう、授業改善を重ねていきます」（佐藤先生）